OB会報

湘南サッカー部OB会　第16号

新チームに期待する

湘南サッカー部OB会会長
22回　桑田　孝

今年の正月の全国高校サッカー選手権の県代表は逗葉高校で初出場とのことである。

日本代表のW杯出場も初出場だが、神奈川県の出場高校数が二一二校もあることを考えると、新設の県立校が代表になるのは日本代表がW杯に出場するよりもっと大変なことかも知れない。立派なものである。正月の大会では大いに活躍して神奈川県のレベルの高さを見せて欲しいと思っている。

ところで、十一月二十四日に関東大学リーグの入れ替え戦があり、私の母校早大（一部七位）が慶大（二部二位）に1—0で敗れ二部に転落した。早大は創部七十四年、慶大は七十年という伝統を誇る学校であり、戦前戦後を通じ両校が日本サッカー界をリードしていたことを考えると次元の低い早慶戦で情無い限りだった。

両校には湘南サッカー部のOBが多勢進学している。一九五一年の戦後最初のニューデリーでのアジア大会に出場した（故）田村恵さん（昭19年卒、早大）や、一九五六年のメルボルンのオリンピックに出場した小林忠生君（旧姓早川、昭24年高卒一回生）のような名選手もいる。

早大はリーグで最多二十四回の優勝回数を誇り、昨年はリーグ優勝をしている。入れ替え戦出場は勿論初めてであり、唯一、二部落ちがなかった学校である。早大の松永監督が「今の早大は品のいい選手ばかりで慶大の方ががむしゃらだった。今年のチームは"早稲田魂"を出さなかった」と嘆いていたそうである。

サッカーに限らず全ての球技のスポーツは点取り合戦である。「ディフェンシィブになるな」これは最近良くサッカーで使われる言葉である。W杯の予選で日本代表が後半戦見ちがえる程良くなり、勝つことが出来たのはディフェンシィブにならず積極的に攻めたからである。そうでなくてはイランには勝てなかったであろう。

一部七位と二部二位の入れ替え戦では引き分けると一部に残留できる。この0.5のハンデイキャップが早大を気持ちのうえでディフェンシィブにさせていたのかも知れない。品が良くディフェンシィブでは勝負に勝てる筈がない。

湘南サッカー部も今年で創部七十七年になる。幸い今年の新チームは前のチームが夏の高校選手権の二次予選に残ったことで新人戦中央大会の出場資格を獲得しており、無条件で関東大会予選に出場出来る。そんな土産を残してくれた三年生に感謝しなければならないが、折角のチャンスである是非生かして欲しいものである。品が良くてディフェンシィブなんて言われないように積極的に攻めるチームであって欲しいものである。

昨年湘南の監督として来られた清水先生が「来年の最上級生は楽しみである。ひょっとするとひょっとするかも知れない」と言っていられる。先生は又、「湘南の教え子の中からオリンピックの日本代表選手を出したい。それが私の夢です」とも言っている。

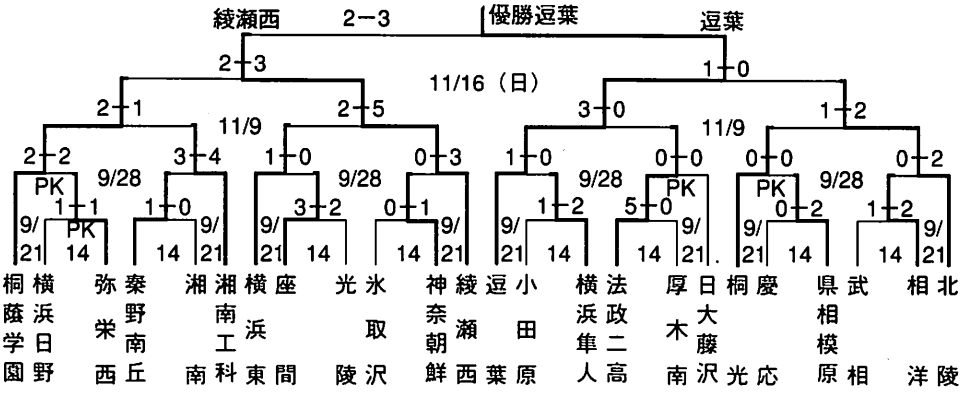
湘南の卒業生では前述の二人の他に、一九五四年の韓国とのW杯予選や、マニラでのアジア大会に出場した大埜正雄さん（昭15年卒、東大）も全日本の選手として活躍した。今の現役諸君の中からそれに続く人が出ることを期待したい。

OB会もディフェンシィブでなく、現役と積極的に交流、十分なバックアップが出来るOB会でありたいと思っている。会員諸君の絶大なるご支援を切にお願いする次第である。

2年間の繋ぎを終えて

総監督　鈴木　中

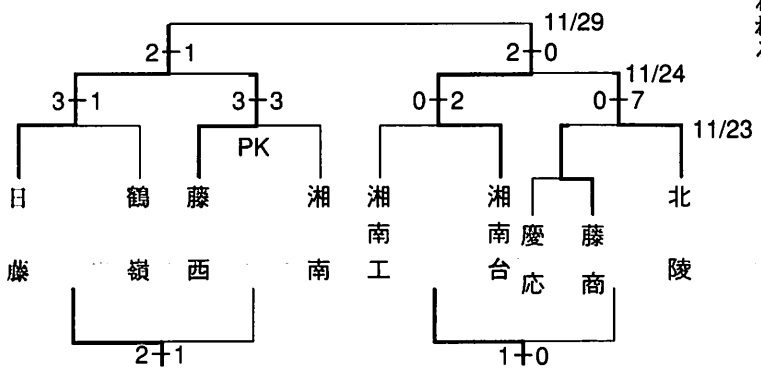
「第76回全国高校サッカー選手権大会神奈川予選」



残念ながらこのような結果に終わり、3年生は全ての試合が終了した。結果はいま一つ満足は出来ないが「胸をはって引退」出来るだろう。長いシーズンの中でこの選手権予選が「本当のサッカー」だと思う。80分間の激闘は「準備と計画・体力・技術」高校レベルの中では最高の戦いである。チーム力から見てあと1・2試合は出来る戦力だと思っている。ベスト32〜24の壁が破れなかった原因をシッカリ反省し次の代へ繋げたいと思う。そして点の取れる選手・中盤・GKここを鍛えれば「優勝」も夢ではない。特に厳しい競り合いの中での基本技術「キック・コントロール」が高まれば、現在の戦力で不可能だとは思っていない。幸い「清水監督・須藤コーチ」の息が合っているので期待は十分出来ると思っている。メンバーも一新し新しくスタートするので私は一歩引いて外からサポートしたいと思っている。約2年間高校生と接してきたが最初はこれは無理かなと「不安」があったが、確かに10年前の「湘南生」では無いが、時間をかけて話せば「理解できる」「湘南」は生きていると思う。ギリギリの勝負をして彼らなりに全力を尽くし3年生の夏を過ぎると始めて「サッカーの面白さ・厳しさ」が判り卒業して行く。そんな味を下級生が知ることによって、彼らのサッカーに厳しさが生まれこの「2次予選」を1・2年生が経験することで今一歩前進する。又2次予選に残る事によって新人戦中央大会出場資格を獲得、そして無条件で関東大会予選に出られる。そんな土産を残した3年生に感謝して又下級生も頑張ることだろう。そして左記のように来年度のスタートの試合が始まった。

［ぜひ皆で応援して下さい・期待に添えるよう頑張ります］

「新人戦湘南地区順位決定戦」（湘南地区代表9校）シード決めの試合が左記のように決まり、県大会が1月末〜64校で争われる。



サッカー部監督として

監督　清水　好郎

平成九年四月一日付、県立秦野南が丘高校から赴任しました。私のサッカー指導歴は、昭和53年〜平成4年まで県立藤沢西高校を指導し無我夢中で15年間を過ごしました。その間鈴木先生には、国体・高体連では大変お世話になりました。また藤塚先生には湘南コースト（地区フェステバル）の運営・国体のスタッフとして一緒に仕事をし、教えていただいた事も多く、本当にお世話になりました。

湘南高校との対戦ではいろいろな思い出があり、苦汁を飲まされたこと等、今でも一つ一つのプレーが頭に浮びます。

秦野南が丘高校には存職4年間ではありますが、湘南地区に戻って見ると浦島太郎のようで、サッカーの地図は変化し、10年前の思い出にひたっている暇は無い様です。

湘南高校の生活も10か月を過ぎ、大分慣れて来た気がします。75年以上の長い歴史を持つサッカー部の伝統と誇りを継承すべく、微力ながら指導していく所存です。

OB諸兄におかれましては、より一層の御理解と御協力の程をお願い申し上げる次第です。

昭和50年3月　日本大学文理学部卒
50年4月　県立川和高校非常勤

～講師着任
52年3月　サッカー部監督
53年4月　県立藤沢西高校教諭
着任
サッカー部監督
平成5年4月　秦野南が丘高校転任
サッカー部部長

●国体関係
昭和54年　主務
55年　主務
63年　コーチ
平成元年　監督
平成6年　監督
平成7年　監督

湘南ペガサス（シニア）の一年

―戦績を中心にして―

'97年度　監督　井上　孝

すっかり押し詰まりました。OBのみなさま、ご健勝のこととお慶び申し上げます。例年のごとく、ペガサス・シニアの活動報告です。

①神奈川県郡市四十雀リーグ3部の試合結果（11チーム参加）

4月　●　0―4　足柄上郡四十雀
　　○　1―0　パフォーマーズ
5月　●　2―3　早園FC
6月　○　3―1　浅野クラブ
7月　○　4―3　座間四十雀
9月　●　0―4　岩崎45
　　●　1―4　神奈川四十雀
10月　●　1―4　県庁四十雀
11月　●　0―2　南足柄四十雀

12月14日の最終試合を残しています。四十雀リーグは、すでに参加30数チームとなる盛況にもかかわらず、なお毎年新規加入があります。三部から成るが、規定によって、新規加入は第3部からデビューということになっているので、3部に定着している（！）わがシニアは毎年新参チームと対戦することになります。当方が勝手に「五十カラ」の年齢構成になっているだけで、相手は無論「四十カラ」。集まりが悪いときなど、30分ハーフはいささかきついと思われるときもありますが、なにしろ酒井佐弘（26回）、山本修・田川明（27回）、近藤壮一（28回）、塩川儒宏（29回）、渡嶋九州男・中原弘巳（30回）という還暦を越えた諸先輩が常連として出場されているのですから、五十才代の若いものがバテタとはいえません。ということで、上記の成績はまんざら捨てたものでもないのです。

②神奈川県五十雀リーグ戦が今年度から発足

2、3年前から、ペガサスが主導して試行的に行なっていた五十雀の試合をリーグに構成して、五十雀リーグ戦が発足した。とりあえず、8チームが名乗りを挙げたが、まだメンバーが必ずしも潤沢でないチームがあるようで、これが軌道に乗るには、もう2、3年かかりそうである。

7月　△　1―1　横浜五十雀
9月　○　不戦勝　神奈川四十雀A
10月　○　3―2　小田原五十雀
11月　●　0―2　茅ヶ崎五十雀ウエスト

このあと、茅ヶ崎五十雀イースト、YKクラブ（横須賀・川崎）、綾瀬五雀との3戦を残しているが、現在までは、4戦して2勝1分1敗　得点4失点5である。上で、四十雀リーグは相手が若いので、と言い訳（！）をしましたがそうすると、このリーグでの一敗はまずいですネ。まあ、相手が強かったという訳です。

③第7回古河マスターズ大会50歳以上の部

6月7日　△　0―0　ヴェルソーレ十和田
　　●　0―1　東京五十雀
6月8日　○　1―0　川越五十雀
　　△　0―0　平成五十雀

例年のごとく、古河遠征でしたが、結果は、昨年並みでありました。

④FUS大会

第2回FUS（付属・浦和・湘南）大会が、今年も11月23日に、世田谷の第一生命グラウンドで各校OBを集めて行なわれた。この大会は、各校50歳代と60歳（以上）代の2チームがそれぞれ総当たりで試合する形式となっており、結果は以下のとおり。

50歳代　○　3―0　筑波大付属
　　○　7―0　浦和
60歳代　○　2―0　筑波大付属
　　○　3―1　浦和

湘南の完全優勝である。その勝因は、二つあると思う。一つは、3校の中で、参加者が一番多いこと（他校は、連続出場で大分バテていた）、第二にはペガサスに代表されるように、普段からプレーをしていること、したがって他校より走れることである。もちろん、付属も浦和もさすがにうまくて、メンバーが集まりさえすれば、やはり強敵であることはまちがいない。だがこの日、湘南の第？期黄金時代の到来が実感された！

⑤親善試合

2月23日　●　0―2　茅ヶ崎五十雀
3月16日　○　4―1　筑波大付属高OB

かくして、一九九七年度のペガサスの試合結果は、FUS大会も含めて、23戦11勝3分9敗、得点36失点40でした。

ことしのペガサス・シニアにとっては、上記の諸先輩の活躍とともに、若い力が加入したことも嬉しいできごとでした。福井民雄・伊通元康・相羽克治（41回）の三君の馬力は大戦力になりました。最後に、今期の監督は、祈り悪しく多忙な年に重なってしまったために、三分の二ぐらいしか試合に出られず、しかも休んだ日の試合は勝利が多く、その責を十分に果たせませんでした。遠征中は、なんとか免れましたが、納会では更迭必至です。60過ぎたら、ガンバルぞ！

「湘南ペガサス活動報告」

45回　浅倉　泰

現在湘南ペガサスは神奈川県郡市四十雀リーグ（3部合計30チーム）を主な活動の舞台とし、マスターズ大会への参加やメンバーの所属している会社のチームとの練習試合などを行っています。昨シーズンは四十雀リーグ一部で2勝5敗2引き分けと苦しい戦績で、一時は2部落ちかという瀬戸際までいきましたが、かろうじて1部へとどまることができました。

昨シーズンから、これまで湘南ペガサスの幹事として長い間チームの発展に尽力いただきました伊通さん、OB会の方で活躍していただいている相羽さん、そして守りの要だった福井さんの3名がシニアチームへ移られました。その代わり、他チームからの移籍組も含めて新メンバーとして10名（湘南OBとOB以外が半々）が加わりました。私が入った頃は人数が足りないこともよくありましたが、最近は20名近くが参加し、交代に頭を悩ますことの方が多くなりました。試合内容ではやはり新メンバーの加入でコンビネーションがうまくいかないこと、交替で試合の流れが損なわれてしまうことがたびたびあり、その結果が昨シーズンの戦績につながってしまったのではないかと思います。

最近のチームイベントとしては、Jヴィレッジへの遠征を行ないました。メンバーの中に東京電力の方がいて、福島の地元チームと連絡を取り、遠征を実現してくれました。当日は東京四十雀、盛岡四十雀、双葉四十雀（地元チーム）とペガサスでリーグ戦を行い、Jヴィレッジの芝の感触を楽しみました。Jヴィレッジの施設は本当に素晴しい施設で、あのような施設を使えるこれからの子供たちは本当にうらやましいと思いました。ただ交通の便はまだあまりよくなく、我々はバスで土曜日朝7時に藤沢を出発して、現地に着いたのが午後1時半ぐらいでした。常磐自動車道が延伸して広野ICができればだいぶよくなるのではないでしょうか。ピッチの使用料は1時間1万円ですので、2試合やっても一人当り千円弱ですから安いものです。来年もこの企画は是非続けたいと思います。来年40歳になる方は浅倉（0466—27—5308）までお問い合わせ下さい。メンバーが過剰気味ですがOBについては加入を受け付けます。どうぞよろしく。

再生を目指して、来年にかける！

～トトカルチョ湘南～

64回　田村　直也

一九九七年、それはサッカー史上歴史的な年となった。そう、日本が念願のワールドカップ初出場を果たした年である。一九五四年に初挑戦して以来、実に43年の歳月がかかったが、それだけにその喜びもひとしおである。来年はフランス本体会が開催され、いよいよ日本が世界の舞台に躍り出ることとなり、ボルテージは更に高まっていくだろう。

そんな明るい話題のあった本年だったが、我がトトカルチョにとっては非常に悔いの残る年となってしまった。藤沢市の殆どのタイトルをとり、郡市大会優勝で華を飾った昨年に比し、今年は郡市大会の出場権を得た以外は特にこれといった戦績をあげられなかったからである。一度も負けなかった市内のチームに対しても、今年は後半に逆転負けを喫することがしばしばあった。

振り返って見ると幾つかの原因が浮かんでくるが、主に以下の2点に集約できると思う。

まず、今年は更なる飛躍を目指し、従来の市リーグに加え、県リーグへも参加したが、取組体制の不備は否めなかった。当初は従来のメンバーに若手メンバーを加えて2チーム編成し、従来のメンバーが県を、若手メンバーが市リーグを取り組むという構想であったが、全くの構想倒れに終わり、特に若手が集まらず、結局同じメンバーで両方共戦うことが多かった。ある程度予想されていたことではあったが、シーズン前の登録から、試合日程の調整、出欠の連絡体制等々、今年の反省を踏まえて修正しなければならない課題はたくさんある。

2点目としては、やはり体力の衰えは隠せなかった。社会人であるゆえ仕方のないことかもしれないが、メンバーの多くが20代後半に差しかかり、20歳前後の学生チームとの運動量の差は歴然、ダブルヘッダーの日なんかは散々であった。何とか、これまでは技と経験でごまかしながら勝ってきたが、これからはそうはいかない。ゆえに、世代交代、チームの若返りが必要であるが、メンバーの多くが入社4、5年目を迎へて転勤も予想されるだけに、早急に取り組んでいかねばならない。これまでも若手メンバーに呼びかけはしてきたが、この場を借りて改めてお願いさせて頂き、年寄（？）と若手が一体となってプレー出来るチームにしていきたいと思う。

以上、今年を振り返って見たが、年々厳しくなっているのは確かである。モチベーションも下がりつつあり、中途半端な気持ちではこのままずるずる下降していくだろう。ただ、日本代表もどん底から這い上がったように、我々も決して諦めずに取り組んでいけば、必ず未来は開

けてくると思うし、まだボールを蹴って楽しむような年ではない。やり残したことは沢山あり、今年からチャレンジした県リーグの一部昇格も決して夢ではない。来年は再生を目指して勝負の年である。

サッカーのメディカルサポート

59回　大沼　寧

私は湘南高校時代サッカーに夢中になり、大学でもサッカーに熱中した。怪我もよくした。医師となり、専攻を決めるとき、サッカー、スポーツに関連した整形外科を選んだのも自然のなりゆきだった。そんなことでサッカーがらみの仕事やセミナーに参加する機会が出来たので、その内容や感想などを紹介したい。

平成7年から平成8年にかけて、Jリーグドーピングドクターを勤めた。2002年Wカップ開催に向けて開始されたドーピング検査について紹介する。ご承知の通りアメリカワールドカップでのマラドーナのドーピング事件は衝撃的であっただけに記憶されている方は多いと思う。サッカーの競技性からドーピングが行われる可能性は低いが、有名選手のドーピング発覚から、サッカー界においてもドーピング検査が注目されるようになった。日本では、平成7年度よりJリーグでドーピング検査が開始されることとなった。その背景には、Wカップ招致活動と各国のリーグ（イタリア、ドイツなど）では、既にドーピング検査は行われている現状があった。方法はアメリカワールドカップで施行された方法が参考とされた。医師が行うことは単純なことだ。試合後半30分に両チームの登録選手の中から各チーム2名ずつを抽選で決定する。選ばれた選手を試合終了時点でルームへ直行させて採尿を行う。採尿するまでは選手は一切ルーム外に出られない。夏の暑い日のゲームでフル出場した選手は尿がなかなかとれず試合後2時間を超えてしまうこともあった。中には監禁されたストレスでか？ルーム内で暴れだした選手もいたと聞いた。海外の大会でのドーピング検査で、アルコールが許可されビールを飲んで採尿したことがあったと代表選手から聞いた。それは選手にとっても我々にとっても良いようだが普通は認められていない。Jリーグでは現在のところ、悪質なドーピング陽性者は一人も出ていないようだ。サッカー以外の記録を競う競技や筋力勝負の競技ではいまだに問題が発生している。検査直前に他人の尿を自分の膀胱へカテーテルを用いて注入し、あたかも自尿として検査を受けようとした選手がいたという話しを聞いた。また、予め採取した自分の血液を大会直前に体に戻し、血中の酸素運搬能力を高めようとした血液ドーピングなるものがおこなわれているとのこと。いずれも実行現場をおさえない限り、検査のみでは陰性である。よくまあ考えるものだと感心してしまう。Jリーグ、そして2002年Wカップではドーピング陽性者が出ないことを願っている。

次に富士通サッカー部のチームドクターの体験を紹介する。チームドクターの仕事は日々の体調管理が重要な仕事であることから常にチームに同行する必要が生じてくる。このためJリーグのチームドクターは、病院との契約のもとに複数人で担当する体制か、個人契約した医師が常に同行し、病院にバックアップしてもらう体制のいずれかである。私の場合は一人で担当したので、一般診療との都合上、同行出来たのは試合のみであった。このため、チームドクターというよりもゲームドクターであった。ゲームドクターの仕事は、ゲーム中のケガの応急処置と試合続行可能かの判断が主である。試合前やハーフタイムに痛み止めの注射を打ったこともあったが例外的で、ほとんどがクーリングや出血創の止血などであった。はじめのうちは試合観戦を楽しみにしていたが、自分が試合に出られるわけではないので、欲求不満が残ってしまった。現在は富士通がプロ化の方向で進んでいることから、地元の関東労災病院がチームドクター契約をしている。

最後に、サッカー関連のセミナーを紹介する。日本サッカー協会が主催しているサッカードクターセミナーとサッカー医、科学研究会がある。いずれも東京慈恵医大の先生がたが中心となり、前者は医師、後者は医師および体育関連学部の人々が参加している。これらのセミナーではサッカーを医学的、科学的な面から捉え、現場にどのように還元するかを考えている。現場で効果的な成果をあげることは難しいが、最近ではアトランタオリンピックでのメディカルサポートの成功やユース世代のメンタルトレーニングの成果などが報告された。サッカードクターセミナーの最後には必ず参加者のサッカー実技（試合）が組まれている。チームのサポートも良いが、自分がサッカーをやるのが一番楽しいと考えている人がほとんどである。

これらのサッカー関連の仕事やセミナーに参加して感じることは、こんなにも多くのサッカー狂いがいるものだ！という思いである。これらの人々に混じって私も、微力ながら今後もサッカーを医学的な面からサポートしていきたいと思っている。

自称サッカー史家として

48回　細川　周平

私が湘南高校に入学した一九七〇年は、メキシコ・ワールドカップの年にあたる。ペレーの活躍でブラジルが圧勝したこの大会は、歴史上最も美しい大会だったと多くの人が回想している。緊迫した試合や華麗なプレイが続出したこともちろんだが、初めて衛星中継を使って世界中にテレビ放送（しかもカラー）されたこともあって、世代の人々の記憶を強烈にしているのだろう。日本では実況中継こそなかったが、三菱ダイヤモンド・サッカーでほぼ全試合を録画放送した。この番組はわがサッカー部員の必修科目で、翌日はロッカー室で見たばかりの試合をひとしきり論じるのが常だった。

私たちの入学時の三年、つまり二学年上のチームは名選手ぞろいであと一勝で関東大会進出というところまでいったチームだが、上野主将が練習後の訓示でいった言葉を今でも覚えている（数年前、本人に会ったら忘れていたが）。「基本通りに（つまり中さんのいう通りに）ボールを回せば、ぼくらだってブラジル相手にパスをつなげるし、うまくいけばゴールだってできるかもしれない」。その二年前のメキシコ・オリンピックで日本がブラジルに勝ったことが念頭にあったのかもしれないが、このくらいダイヤモンド・サッカーは精神的な影響力があった。バイブルのようなものだった。この番組は首都圏と静岡県だけ放送されたそうだが、私の世代の日本のサッカー好きで、その感化を受けなかった者はいないといっても過言ではないだろう。

グラウンドでは芽の出なかった私だが、サッカー好きは卒業後も続き、八二～八四年には当時ジーコ、プラティニ、ファルカン、ルンメニゲなどのいたイタリアに留学し、八六年にはメキシコ・ワールドカップを観戦しに出かけ、二年後には『サッカー狂い』（哲学書房）という哲学書（？）を出版した（「読んだ」という人よりも「もっとわかりやくす書いてくれないか」という注文のほうが多かったが）。一九九一年から九六年まで、ブラジルとスペインに半分ずつ住んだのも、表向きは本業の音楽研究や妻の仕事が主な理由だったものの、一流のサッカーを見つづけたいという欲求がなかったとはいえない（スペインではレアル・マドリードのホーム、サンチャゴ・ベルナベウ競技場から五分のところに住んでいたので、うちから二階席までたった十分でいけた）。

ヘタなりにボールを蹴りたいと思いつつも、椅子に座りワープロの画面をにらむ毎日を送るうちに、いつのまにか年をとってしまった。サッカーの歴史や社会学には関心が強く、各国を旅行しては研究書を集め、時折、サッカー関連の記事を新聞に載せたりしている。試合ごとの評や最新情報、技術論や状況論よりも長いスパンでサッカーについて考えていたい。今はほかの何よりも好きなブラジル・サッカーについて、ポルトガル語資料から本を書きたいと思っている。上野さんのような気負いをこめていうならば、私にはサッカー選手やチームを育てることはできないけれど、サッカーについての書かれた文化を育てることはできる―こう思って調べ物をしている。

湘南の三年間は不器用ながらもボールとともに生き、チームメートとともにグラウンドに立つ貴重な体験を与えてくれた。思ったようにボールは飛んでくれなかったし、満足なヘディングをしたこともない。それでも私のサッカー記事のどこかに何か親しい身体感が残っているとすれば、それは高校の体験の賜物以外の何物でもない。改めて蹴師、蹴友に感謝したい。

（現在は東京工業大学助教授）

訃報

OB会名誉会長の天野武一先輩が、12月2日、ご逝去されました。89歳でした。ご冥福をお祈り致します。天野さんは、第一回の卒業生で、長くOB会長をつとめられました。OB会では、今年の1月15日に米寿のお祝いをさせていただいたところでした。ご葬儀には、OB会を代表して、桑田会長が参列されました。

ご略歴は以下のとおりです。（神奈川新聞より抜粋）

天野　武一氏（あまの　ぶいち）
元最高裁判事、元大阪高検検事長

東京地検特捜部長時代に売春汚職を摘発。神戸地検検事正時代には山陽特殊鋼の粉飾決算事件を、大阪地検検事正時代にはタクシー汚職事件の捜査をそれぞれ指揮した。

高松、福岡、大阪の各高検検事長を経て、1971年最高裁判事となり、78年定年退官。最高裁大法廷では73年の尊属殺人規定違憲判決、76年の旭川学力テスト判決、77年の津地鎮祭訴訟判決などに関与した。

60才以上超ＯＢの活動報告

湘南ペガサスシニア　27回　山本　修

60～65才の湘南ペガサスシニアのメンバーと65才以上の湘南ＯＢとでチームを編成し、湘南ＯＢサッカークラブの名称で、参加資格60才以上の下記の2大会に出場した。

刈谷スーパーエイジ大会では、往年の全日本代表選手が並んだ強豪の関学・中央大ＯＢ連合チームと対戦し、互角以上の試合内容で得点チャンスは湘南の方が多かったが惜しくも引分けに終わった。

大学ＯＢチームはほかにも慶応大、東京大のＯＢチームが例年参加しているが、高校ＯＢ主体の参加は湘南ＯＢクラブだけであり、60才以上の超ＯＢが湘南ペガサスシニアのメンバーとして四十雀リーグ、五十雀リーグに参加している年間活動がこのチームの基盤になっている。

宇都宮市制一〇〇周年記念　東日本マスターズ大会

4戦　2勝1分1敗　得点7　失点5

3月8日
湘南ＯＢクラブ　1－2　宮城四十雀
湘南ＯＢクラブ　2－1　真岡パープルレディス

3月9日
湘南ＯＢクラブ　2－2　茨城四十雀
湘南ＯＢクラブ　2－0　栃木大昭ＦＣＡ

第4回刈谷スーパーエイジ大会

3戦　1勝2分　得点4　失点1

9月27日
湘南ＯＢクラブ　0－0　兵庫レッドスター

9月28日
湘南ＯＢクラブ　0－0　関学中央連合軍
湘南ＯＢクラブ　4－1　岐阜サッカーＯＢ会

12月7日　五十雀リーグ
湘南ＯＢクラブ　0－2　ＹＫクラブ

現役からの報告

主将　森下　誠

今年の新チームは清水先生の指導の下、日々の練習の中で基礎体力・基礎技術の向上、そして基本戦術の理解などに取り組んでいます。清水先生が来てからは、ゲーム内の役割分担だけでなく、しっかりとした部全体での役割分担もはっきりとし、部員一人一人が、この伝統ある湘南高校サッカー部の部員であるという自覚をもてるようになりました。毎日の先生の徹底した指導により、自分達のサッカーがはっきりとしてきて、少しづつ自信を持てるようになりました。新人戦の地区予選では不本意な成績に終わってしまいましたが、来年の本大会に向けて、部員全員で良いチームを作りあげてベスト4を目標に、そして後の大会ではできるかぎり上位を目指していきたいと思っています。今後共、ＯＢ皆様のご協力・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

平成8年度　神奈川県サッカー大会　新人戦

1回戦
湘　南　2－1　希望ヶ丘

2回戦
湘　南　0－1　武　相

平成9年度　関東

1回戦
湘　南　3－0　厚木西

2回戦
湘　南　1－1　武　相
PK　勝者

平成9年度　高校総合体育大会

1回戦
湘　南　4－1　関東六浦

2回戦
湘　南　3－0　大和西

3回戦
湘　南　0－0　城　山
PK　勝者

4回戦
湘　南　0－0　湘南工科
PK　勝者

平成9年度　神奈川県選手権大会

第1次予選
1回戦
湘　南　3－0　大　船

2回戦
湘　南　2－0　逗子開成

3回戦
湘　南　3－0　港南台

第2次予選
1回戦
湘　南　0－1　秦野南が丘

※最近1年間の大会記録です。

蹴球祭・総会のご案内

日時　1月15日（祝）12：30～
場所　湘南高校

当日午前中より新人戦県大会会場になっております。湘南高校は1月11日（日）の試合結果により、試合が組まれるかもしれません。スケジュールは以下の予定で考えておりますのでOB皆様多数のご参加をお願いいたします。

〈グランド予定〉
9：30～14：00　新人戦県大会
14：10～14：40　OB若手―現役　Aコート　Bコート
15：30～16：20　50代～OB戦　40代～OB戦　20・30代～OB戦

〈セミナーハウス予定〉
12：30　OB総会（出席者にお弁当）
16：45　懇親会
現役2年生と共に約2時間の予定
（会費別途千円予定）

〈当日分担〉
総会　相羽　受付・会計　武藤
懇親会　場山口　マッチメイク　関
懇親会　山口

※若手を中心にお手伝いよろしくお願いいたします。

お願い

10年度会費納入の件

9年度は皆様の御協力ありがとうございました。本年もよろしくお願いいたします。

・社会人　一万円
・学生　五千円

蹴球祭当日、受け付けを致しますが、御欠席の方は同封の用紙にてお振込み下さるようお願いいたします。なお、下記銀行口座も受け付けていますのでご利用下さい。

横浜銀行　本店　普通預金
口座番号　0191166
湘南高校サッカー部OB会
武藤俊一　電話
0466-34-9329

平成10年度湘南サッカーOB会予算案

収入見込み

210名（社会人180名、学生30名）
180×10,000+30×5,000＝1,950,000

繰り越し金	12,580
計	1,9562,580

支出

現役寄付、合宿遠征補助	800,000
指導者支援金	300,000
印刷費	260,000
通信・事務費	200,000
蹴球祭	150,000
遠征OB分補助	150,000
会議費	30,000
予備費	72,580
計	1,962,580

平成9年度会計報告

収入

会費・寄付	2,091,000
繰り越し	28,808
利子	232
計	2,120,040

支出

現役寄付	680,000
指導者支援金	200,000
遠征補助（OB）	100,000
蹴球祭	131,488
天野前会長米寿祝い	170,633
夏合宿補助	40,000
筑波大付属戦補助	30,000
通信・事務費	263,693
印刷費	251,320
会議費	43,294
OB会備品（プリンター等）	196,800
通帳残	12,812
計	2,120,040

※現役への寄付は3月、8月、10月に実施いたしました。現役は、ボール代、消耗備品代（テープ、薬、飲料等）、備品代（水イオン器等）他遠征合宿補助に使わせていただいております。平成10年度は、年間費用等現役と相談しながら寄付を実施し、また、OB各位にご報告させていただきます。